

## 「妻ラケルの死と父イサクの死」

2021年05月11日

その難産で苦しんでいたとき、助産婦は彼女に言った。「心配ありません。今度も男の子です。」ラケルは死にかかって命が絶えようとしたとき、その子をベン・オニと名付けた。しかし父はこれをベニヤミンと名付けた。ラケルは亡くなり、エフラタ、すなわちベツレヘムに向かう道のそばに葬られた。(創世記 35 章 17 節～19 節) イサクの生涯は百八十年であった。イサクは老いた後、生涯を全うして息絶え、死んで先祖の列に加えられた。息子のエサウとヤコブが父を葬った。(創世記 35 章 28 節～29 節)

ヤコブ一族はベテルからエフラタに向かった。その道の途中、妻ラケルは産気づいたが、難産であった。ラケルが、難産で苦しんでいたとき、助産婦は、「心配ありません。今度も男の子です」と言って、励ました。ラケルは、最初の子ヨセフを産んだ時、「主がもう一人男の子を加えてくださいますように」と祈った。もう一人の男の子が与えられたが、荒野で羊を追う生活は厳しく、高齢出産で、体力がなく、命が絶えようとしていることを悟った。彼女は難産の末、生まれた子を「ベン・オニ」と名付けた。ベン・オニとは、「私の苦しみの子」という意味である。難産で苦しみながら産んだ子どもで、ラケルは子どもの成長を見ることはできない、また、子どもは母なし子として寂しく生きなければならない。断腸の思いで、ベン・オニと叫んだのであろう。しかしヤコブは、この子を「ベニヤミン」と名付けた。ベニヤミンは「右(手)側の子、幸いの子」という意味である。右手は利き手で力を表す。神の右と言えば、祝福の方角を指す。ヤコブは、右手側の力と祝福を受ける幸いな子ベニヤミンと呼んだ。「苦しみ」を「幸い」に替え、父の愛を託したのである。彼は母リベカの故郷にたどり着き、井戸端で初めてラケルに出会った時から愛し、妻とし、ラケルのために続けてきた。ラケルは、父ラバンの怒りを、テラフィムを隠し通してまでかわしてくれた。ラケルの死は、ヤコブにはこれまで味わったことのない痛み、悲しみであった。ラケルの亡骸をエフラタの道の傍に葬り、墓標を立てた。

イスラエル(ヤコブ)がミグダル・エデルを過ぎた所に天幕を張った。この地に住んでいた時、長男ルベンが、父ヤコブの側女ビルハのところに入って寝た。このことが、ヤコブの耳に入った。この時、ヤコブは何も言わず、何の行動も起こしていないが、心に深く傷ついた。その傷により、臨終で祝福を語る時、ルベンに対し、「お前は父の寝台に上って汚した。私の床に上った」と、神の祝福の後継者にはなれないと語っている。

ヤコブの息子たちは12人であった。レアの子がルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンで、ラケルの子がヨセフとベニヤミンである。ヤコブは、愛妻ラケルの亡き後、彼女が産んだ二人の息子を偏愛、溺愛する。ラケルの召し使いのビルハの子はダン、ナフタリで、レアの召し使いのジルパの子がガド、アシェルである。これら12名がイスラエル12部族を担うことになる。一人娘のディナは、当然ながら、数に入っていない。

ヤコブは、父イサクのいるキルヤト・アルパ、すなわち、ヘブロンにやって来た。ここは、祖父アブラハム、父イサクが一時、滞在していた所である。ここで、イサクは180年の生涯を終えた。人が良く、穏やかな人柄のイサクは、好々爺として晩年を過ごしたに違いない。死んで、先祖の列に加えられた。長男エサウと次男ヤコブは、二人して父を葬った。二人の間には、諍いはなく、協力して、父を送ったようだ。イスラエル人は死者に対して、哀悼の心を寄せ、丁重に扱う民族であることが分かる。